

# エゾテリズムとは何か

révélation から Révélation へ

岡本倫典

『ロマン主義のオカルト起源』の序文にオーギュスト・ヴィアットは言う、「この広い、にもかかわらず手つかずのエゾテリズムという領野にあって、私たちは自らの限界を設定していた。〔中略〕私たちがロッジへと関心を向けたのは、ひとえにその神秘主義との関連に限ってであった<sup>1</sup>。」また、ロマン主義研究に対するヴィアットの作品と同様の地位をナチズム研究に対して占める重要な著作『ナチズムのオカルト根源』にも次のようにある、「オカルティズムは、古代に根差し、西洋のエゾテリックな伝統と称呼され得る宗教的思考方法に、その基礎を有している。その主たる構成要素は、グノーシス主義であり、錬金術と魔術を論じたヘルメス文書であり、新プラトン主義であり、カバラであるが、いずれもが紀元初めの数世紀、地中海東部地域に端を発している。本来グノーシス主義とは、グノーシス、あるいは霊的な内容に関する特殊でエゾテリックな知識を所有する旨を主張する、原始キリスト教徒たちの間に行われたいくつかの異端の教派の信仰を言う<sup>2</sup>。」

いったい、私たちの事としようとしているエゾテリックなもの、エゾテリズムとは、オカルトなもの、オカルティズムなのだろうか、神秘主義か、はたまたグノーシスとグノーシス主義か、錬金術や魔術といった隠秘学なのか、

---

<sup>1</sup> Auguste Viatte, *Les Sources occultes du romantisme*, t. I, Honoré Champion, Paris, 1979, p. 6. ロッジとは、もちろん、フリーメーソンのロッジのことである。

<sup>2</sup> Nicholas Goodrick-Clarke, *The Occult Roots of Nazism*, New York University Press, New York, 1985, p. 17. エゾテリック、エゾテリズムの語義を曖昧にしたままでの使用、殊にオカルトを始めとする大なり小なり玄妙不可思議な含意を有する語との混同は、無論のこと、アカデミックなスラングに特有のものというわけではなくて、一般のフランス人の語用にも認められる。その好個の例を一つだけ見ておこう。「ルーヴルのピラミッドには不思議でオカルト的な様相がいくつもある。きっかりパリ子午線零度の軸上、首都の丁度真ん中に造られたこのピラミッドは、死とイニシエーションに密接に結び付いたエゾテリックな意味を帯びている。」(Courrier des lecteurs de *L'Est républicain*, 28 mars 1988, cité dans Véronique Campion-Vincent et Jean-Bruno Renard, *Légendes urbaines*, Payot, Paris, 2002, p. 307.) 太陽王ルイ十四世によって定められたパリ子午線と、ピラミッド、そして当然それと関連付けられるのでなければならぬオベリスクという太陽崇拜の古代エジプト文明の遺産とが、かつてイシス崇拜の行われたパリに、それも十二人の将軍を従えたナポレオンの名を冠する広場に時空を超えて会するのである！

あるいはヘルメス主義か、それとも新プラトン主義やカバラなのか。いかにも犬の朝飯、闇夜の鳥といった風情であるが、ともかくも、例えばエゾテリスムとはオカルティズムである、いや、グノーシス主義である、などの記述が、たとえそれが大なり小なり正鵠を射たものであるにもせよ、エゾテリスムとは何かを考える上では、別段の役にも立ちはしないだろうことだけは明らかである。ある未知数を表わす記号を、その未知数に近い値を持つであろう別の未知数を表わす記号によって置き換えてみたところで、その未知数を解明することにはならない。そもそもしてからが、肝心の未知数が定数なのか変数なのかも定かではないのだ。どうしても、エゾテリスムとは何かの設問の劈頭にあって、未だ海の物とも山の物ともつかないエゾテリスムについて、私たちが持っている唯一確実な知識、と言うよりもむしろ確実とみなさないでは議論にならない知識から出発しなければならない。猫を猫と、エゾテリスムをエゾテリスムと呼ぶことから始めたいと思うのである。

\*

夙にジャン・ピエール・ロランによって指摘されているように<sup>3</sup>、エゾテリスムという言葉は、飽くまで現在までに確認されている限りではあるが、1828年、歴史学者ジャック・マテの『批判的グノーシス主義史』に初めて現れた。バシリデース派の秘密教についての記述である。「彼らに敵対した人たちの証言に関しては、聖イレナエウスのそれが端的である。この教父の請け合うところによると、バシリデース門徒の誰しもが同教派の秘儀を知っていたわけではない。千人中かろうじて一人、一万人の内せいぜい二人のイニシエがあったというのだが、数字に誇張はあるかもしれないにもせよ、肝心の事実のためには極めて確固たる資料的裏付けになる。いずれにもせよ、ピタゴラスの囀に倣ってバシリデースは弟子たちに五年にわたる無言の行を課したのであったが、アレクサンドリア学派の哲学者たちの手でピタゴラス主義が蘇ろうとしていた時代にあっては、さほどに驚くにも当たらない制度である。かてて加えて、この試練とこのエゾテリスムとは中国からガリアまで古代世界を通じて行われていた。孔子門下三千人の内、イニシエは七十二人あるに過ぎなかった<sup>4</sup>。」最後の七十二弟子については、マテはドイツ書を参

---

<sup>3</sup> Jean-Pierre Laurant, *L'Esotérisme chrétien en France au XIX<sup>e</sup> siècle*, L'Age d'Homme, Lausanne, 1992, p. 19.

<sup>4</sup> Jacques Matter, *Histoire critique du gnosticisme*, t. II, F. G. Levrault, Paris, 1828, pp. 82-83.

照しているが、『史記』「孔子世家」、「弟子の数はおおかた三千人に達したと言うのだが、ひとりで六芸のすべてに通じたものが七十二人あった<sup>5</sup>。」によるのであろう。

見ての通り、最初の用例にあってエゾテリスムの語は、試練に打ち勝った少数者のみに知ることが許される秘密教程度の意味で用いられているのであり、私たちの当面の関心事であるべき件の秘密教の内容については教えるところがない。そもそもがマテからの引用箇所の興味はそうした秘密の開頭にあるわけではないのであって、むしろ注目すべきはエゾテリスムの普遍的性格の強調である。「この試練とこのエゾテリスムとは中国からガリアまで古代世界を通じて行われていた。」中国の孔子から、ギリシアのピタゴラス、あるいは彼に伝授を行ったエジプトの神官を経て、ガリアのドルイドまで、この段階では同一の内容を持ったとまでは言えないにしても、少なくとも同一の形式を取った秘密教が「古代世界を通じて行われてい」て、しかもバシリデーヌの生きた紀元第二世紀のアレクサンドリアにあってはなお、使徒らの説くエゾテリスムに対するキリスト直伝のエゾテリスムとして存続していたというのだ<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> 『史記世家(中)』、小川珠樹・今鷹真・福島吉彦訳、岩波書店、1982年、319頁。

<sup>6</sup> ここでどうして『ギリシア哲学者列伝』の冒頭を思い浮かべないでいられようか。「哲学の営みは、ギリシア人以外の異民族(バルバロイ)の間で起ったと言っている人たちがいる。すなわち、ペルシア人たちのところにはマゴス(呪術師)たちがいたし、バビロニア人やアッシリア人たちのところにはカルダイオス(占星術師)たちが、またインド人のところにはギムノソピステス(裸の行者)たちが、そしてケルト人やガラタイ(ゴール)人たちのところにはドゥリュイデスないしセムテオスと呼ばれる人たちがいた[中略]なおまたエジプト人たちも、ヘパイストスはナイルの子であって、彼が哲学を始めたのであり、そして神官や預言者たちが哲学の指導者であったとしている。」(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(上)』、加来彰俊訳、岩波書店、1984年、13頁。)しかも、「ギムノソピステスたちやドゥリュイデスたちは、謎めいた仕方でも語りながら哲学した」(同書、16頁。)のであり、エジプト人たちは「神々を謎めいた形で表現した」(同書、19頁。)という。もちろん、秘儀の伝授を受けていない俗人にとっては「謎めいた」教え、エゾテリスムが問題となっているわけである。そして、哲学という言葉を最初に用いたとされる(同書、20頁。)ピタゴラスは、「(バビロニアの)カルダイオス人(の神官)たちや、(ペルシアの)マゴス僧たちのところにも滞在した。次いで彼は、[中略]エジプトでも、神殿の内陣奥深く入りこんで、神々に関することを秘儀のなかで学んだのだった。」(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(下)』、加来彰俊訳、岩波書店、1994年、14-15頁。)そして、星に導かれて上のマゴス僧、東方三博士がキリストを礼拝しに来たこと(マタイによる福音書、II, 1-12.)、そしてキリストの弟子の一人マッテアから「隠された言葉」(『ナグ・ハマディ文書1 救済神話』、荒井献・大貫隆・小林稔訳、岩波書店、1997年、254頁。)の伝授を受けたバシリデーヌの教説に現れる秘密の名アブラサクス $\alpha\beta\rho$

古代世界を通じて広く行われていた秘密教の形式としてのエゾテリスムの普遍性との関連において、さらに指摘しておきたいのが、その形式について述べた表現自体にさえも認められる普遍性である。例として、歴史学の研究書であったマテのそれとは全く性質を異にする作品、トエルティウスの錬金術書『開かれた化学の空』に、この本の出版者であり、J.F.R.C.、すなわち *Imperator Frater Rosae Crucis* を称するヨハン・カルル・フォン・フリザオが附した註釈の一説を見てみよう。「永遠なる神が私たちをお助け下さる。何故ならば、これらの作業、これらの秘密を知るに至る者は、数百人の探究者の内に、かろうじて一人あるかないかなのであるから。秘儀を追い求める大勢の連中については、言うまでもない。彼らの間のかろうじて一人が、これらの作業や秘密の一つを発見できるかできないかである。[中略]数百人の内、神聖魔術を修し得る人は一人あるかないかである。それでも言い過ぎだ。何故ならば、そうした人たちも一つか二つの作業を知っただけで満足してしまうのだから。といったわけで、薔薇十字団員にとっては断じて七つを超えない魔術の数は、この連中によって水増しされてしまうことになる。もっとも、そんなことが可能であるとしてではあるが。何故ならば、魔術的な数に基づき、同胞団が完全であるためには七十七人から成るのでなければならないのである<sup>7</sup>。」そして、薔薇十字たる「私たちの祖先はウァレリアヌスとディオクレティアヌスの時代には既に存在していた<sup>8</sup>」のであるという。ここで、今度は『史記列伝』によるならば、「孔子の弟子でその学問をならい、一人で六芸に通じていたものは、七十七人ある<sup>9</sup>」ことを思い出すとき、マテによって見た紀元二世紀におけるエゾテリスムの形式は、薔薇十字、より正確に言えばクリスチャン・ローゼンクロイツなりフリードリヒ・ローゼなり以後、薔薇十字と呼ばれることになるイニシエたちによって受け継がれていた。つ

---

α σ α ξ と、エジプト人によるならば哲学の父であるというヘパイストスの父ナイル ν ε ι λ ο ς の名とが等しく 365 の数値を持つこと (P. Perdrizet, « Isopsépie », *Revue des études grecques*, t. XVII, n° 76-77, juillet-octobre 1904, p. 355.) も合わせて思い出しておくべきであろう。

<sup>7</sup> J. G. Toeltius, *Le Ciel chymique ouvert*, traduit par Béatrice Descamps, Sesheta Publications, Rouen, 2014, p. 136. フォン・フリザオまたはフリダオについては、Christopher McIntosh, *The Rose Cross and the Age of Reason*, State University of New York Press, Albany, 2011, pp. 33-34. を参照。インペラートルは薔薇十字系組織における指導者の肩書である。「黄金の夜明け」にあって、創設者の一人であるベルクソンの妹婿マサースを放逐した W・B・イエイツが同結社のインペレーターとなったことは余りにも有名である。

<sup>8</sup> J. G. Toeltius, *Le Ciel chymique ouvert*, op. cit., p. 137.

<sup>9</sup> 『史記列伝 (一)』、小川珠樹・今鷹真・福島吉彦訳、岩波書店、1975年、74頁。

まるところ、ガリアから中国に渡るエゾテリスムの空間的普遍性のみならず、古代から近現代に渡る時間的普遍性もまた勘案する必要が出て来ることになるろう。

ともあれ、この形式の普遍性を強調したことを除けば、エゾテリスムの概念の形成と規定に関してのマテの寄与は、当の語を初めて（それも飽くまで現在までに判明している限りにおいてであるが）用いたとされているというむしろ歴史的な点に限定されているわけである。いみじくもワウター・J・ハネフラーフは総括している、「マテはそうした秘密の教えを指し示すものとしての形容詞エゾテリックの長きに渡る慣用を踏襲したのに過ぎなかった。

[中略] 実質的には、マテによって理解された限りでのエゾテリスムの誕生はかくして確かに彼に端を発するものではなかった<sup>10</sup>。」残念ながら、「長きに渡る慣用」を古代から辿り直すことは私たちのよくするところではない。しかしながら、さしあたり、マテによるエゾテリスムの用例に留まるのではなくて、少なくともこの語に最も直接的な仕方で行先し、その最も直接的な源泉であったフランス語の形容詞エゾテリックへと遡ってみることが是非とも必要であることは言を俟たないであろう。

やはりジャン・ピエール・ロランによれば<sup>11</sup>、形容詞エゾテリックがフランス語の単語として最初に現れたのはルイ・フランソワ・ド・ラ・ティエルスが1742年に刊行した『至聖フリーメーソン同胞団の歴史、義務、規則』においてであった。ラ・ティエルスの名を後世に伝えることとなったこの作品は、思弁的メーソンリーの根本経典と称すべきかの『アンダーソン憲章』

(1723年)のかなり自由な翻訳、あるいはむしろ翻案であって、歴史的にも深甚なる興味のある文献なのではあるが、私たちの所期の目的はメーソンリー史を論じることにはないので、早速肝心のエゾテリックの登場する箇所を見てみよう<sup>12</sup>。単に石造建築ではなくはるかに高遠なる意味での建築の術としての、つまりしかるべき場所にしかるべきものを配置して真のコスモス

<sup>10</sup> Wouter J. Hanegraaf, « The Birth of Esotericism from the Spirit of Protestantism », *ARIES*, vol. X, n° II, 2010, pp. 202-203.

<sup>11</sup> Jean-Pierre Laurant, *L'Esotérisme chrétien en France au XIXe siècle*, op. cit., p. 18, n. 1.

<sup>12</sup> ラ・ティエルスとその作品については、François Labbé, *Le Message maçonnique au XVIIIe siècle*, Dervy, Paris, 2006, pp. 97-117.を参照。ちなみに、最初に出版された『アンダーソン憲章』の仏訳は、1736年、オランダ人ヤン・クエネンによるものであった (*Id.*, pp. 117-118)。オランダではその一年前の1735年に一切のメーソン集会所が禁止されていたわけで (Daniel Ligou, *Dictionnaire de la franc-maçonnerie*, PUF, Paris, 2006, p. 909.)、クエネン訳成立の経緯についても一方ならぬ興味があるのであるが、残念ながら突っ込んで考えてみる余裕がない。

たる宇宙を建築する術としてのメーソンリーの歴史を人祖アダムから辿る歴史記述が古代ギリシアに差し掛かったところである。「ギリシア古代のロジは、国王の庇護を受けてはいたものの、ピタゴラスとソクラテスの悲運によって引き起こされた恐慌から立ち直れないでいた。身を守るために導入されたのが、二種類の教義を、エグゾテリックと称され、外部の人間にも伝授可能な教義と、エゾテリックあるいは秘密と称され、ロジの成員だけを対象とした教義とを教える慣例であった<sup>13</sup>。」

既に述べたように、ラ・ティエルの作品は『アンダーソン憲章』の自由な翻訳、翻案であったのであるが、私たちの関心との関係において重要であるのは、今引用した箇所が正しく翻案された部分であって、そもその憲章には対応する記述は存在しないということである<sup>14</sup>。したがって、もちろん先行する英語の形容詞エゾテリックは既に存在していたものの<sup>15</sup>、エゾテリックの語は、ここでも現在までに判明している限りではと留保を付ける必要はあるのであるが、この時点でラ・ティエルによって初めてフランス語に導入されたと言えるであろう。しかしながら、上の引用を見ての通り、先のエゾテリスムの場合と同様、限定された人のみを対象とした門外不出の教義をエゾテリックと修飾するとあるばかりで、このエゾテリックな教義の内容がいかなるものであるのかに関しては全く明らかになってはいない。

---

<sup>13</sup> Louis François de La Tierce, *Histoire obligations et statuts de la très vénérable confraternité des francs-maçons*, François Varrentrapp, Francfort sur le Meyn, 1742, p. 38. *Id.*, p. 2.によると、この作品は1733年には既に完成されていたという。

<sup>14</sup> 歴史家のダニエル・リグーによるならば、『アンダーソン憲章』には「何らかのエゾテリスムに対するいかなる言及も行われていない。」(Daniel Ligou, « Introduction », *Anderson's Constitutions Les Constitutions d' Anderson*, 1723, traduit par Daniel Ligou, Editions maçonniques de France, s.l., 2002, p. 38.) しかし、これまでに見てきたような形式としてのエゾテリスムの表れと解釈可能な一節はあって、「これらの地域、チグリスとユーフラテスの畔、後に数多くの祭司にして数学者である学者たちが活躍したが、カルダイオス人あるいはマゴスの名で知られるこの人たちは幾何学というこの良き科学を伝えた [中略]。しかし、形成されたロジの中でもなければ、これ以上前提について話すのは不適切である。」(*Id.*, pp. 86-89.) カルダイオス人やマゴスによって伝えられた学知についてはロジの外では話せない、つまりは「ロジの成員だけを対象とした教義」であるというわけである。ところで、やはり同憲章によるならば、エジプトでの修学中に捕虜としてバビロニアへと連行されたピタゴラスは、その地で「カルダイオス人のマゴス」と交わったのであるという (*Id.*, p. 120, 121.)。

<sup>15</sup> *The Oxford English Dictionary*, vol. V, Clarendon Press, Oxford, 1989, p. 393.によると、英語の形容詞エゾテリックの初出はスタンレーの『哲学史』(1655-1660)で、ピタゴラスの顕密二つの教えとの関連で、後者を指してエゾテリックの語が用いられている。

むしろ注目すべきは、マテの場合にあつては、古代世界に広く行われた秘密教の普遍的形式を称してエゾテリスムと言ったのであったように、ラ・ティエルスの場合にあつても、東西両洋にアダムからキリスト紀元十八世紀に渡って伝えられた空間的・時間的に普遍的な教義が問題となっていることである<sup>16</sup>。と言うのも、今度もまた中国への言及があるからで、「中国人、このアジアの最果ての地の住人は、早くからメソンリーの才において他に抜きんでていたわけであるが、そうならないではいなかったのである。何となれば、彼らの中にはセムとノアその人、あるいは向こうでの呼び方によれば伏羲がいたのであるから<sup>17</sup>。」Chinois とほとんどそのアナグラムである Noachites とを関連付けること自体は別にオリジナルな発想ではなくて、十八世紀で言えば例えばマルチネス・ド・パスカリなどでも見たように記憶しているが、ともあれここで重要なのは「アジアの最果ての地」中国から思弁的メソンリー発祥の地のイギリスに至る肝心の教え、エゾテリックな部分とエグゾテリックな部分とからなる教義の普遍性である<sup>18</sup>。そして、アンダーソンの記述を翻案しながらラ・ティエルスはこの普遍的な教えを称してメソンリーと言っているのだが、これが単なる石工の術、石造建築の技術ではないことは、その才に長けているとされた中国人にあつて、古来最も一般的に用いられてきた建材が石ではなく木であるという誰しもが知る事実からも明らかであるだろう。

ここまでの結論としては、真にエゾテリックな教義、エゾテリスムが問題となっているとすれば、それも当然のことなのではあるが、とにかく「形容詞エゾテリックの長きに渡る慣用」を歴史的に辿ってみるだけでは、エゾテリスムとは何かの問いへの完全な答えとはならない。だから、さしあたりは以下の点を確認するに留めておくことにする。フランス語の単語としてのエゾテリックは、ギリシア古代哲学におけるこの語の使用を踏まえながら、少数のイニシエだけに与えられる教えを修飾する形容詞として、1742年あるい

---

<sup>16</sup> キリスト紀元などと殊更な言い方をしたのは、フリーメーソンたちは伝統的にアダムの創造を元年とするメソン紀元を用いているからである。メソンリーにおいていわゆる西暦は世俗紀元 (ère vulgaire) と称される。

<sup>17</sup> Louis François de La Tierce, *Histoire obligations et statuts de la très vénérable confraternité des francs-maçons*, op. cit., p. 12. 『アンダーソン憲章』自体には、インド以東への言及はない。

<sup>18</sup> 『アンダーソン憲章』以前の作業的メソンリーが残したオールド・チャージには、イギリスにメソンリーを招来した人物としてピーター・ゴワー (Peter Gower) の名が見えるが、これがピタゴラスの転訛したものであることは言を俟たない。ことほどさように、エゾテリスムとピタゴラスは切っても切れない関係にあるらしい。

は1733年、フリーメーソンの文献に登場した。当然、メーソンたちは、イニシエーションを経て参入したロッジで授かる教えを、かつてのピタゴラスの学院での教えがそうであったように、エゾテリックなものと認識していたのでなければならない。このギリシア哲学史とメーソンリーのいわば専門用語であったエゾテリックの語から、1828年、少数者のためだけにエゾテリックな教義を伝授するという制度を、さらにはエゾテリックな教義そのものを指してエゾテリスムの語が成立した。そして、エゾテリックと修飾され、エゾテリスムと称される秘密教は時間的空間的に普遍的な性格を持つものと考えられている。

エゾテリスムとは秘密教、俗人には秘された教義である。具体的なエゾテリスムの現れ、それについての言説から独立して、言葉そのものの意味によって確実にしなければならない、エゾテリスムであるためにはおよそ一切のエゾテリスムに正しく普遍的に認められなければならない形式上のこの特徴は、何かそれ以上のことを暗示しているとは考えられないだろうか。つまり、ある教義がエゾテリスムという外的形式を取るという事実は、それ自体によって、当の教義に内在的な何らかの性質を示しているのではないだろうか。とりわけ現代のような民主主義と平等主義をドグマとし、秘密をただ秘密であるというだけでほとんど条件反射的に憎悪する時代にあって最も自然な反応は、何か隠されているとするならば、それはその何か人が人には言えないような性質を持っているからだ、というものであるだろう。実に、語源的にはエゾテリックなことを指す英語の名詞エゾテリカは遂にはボルノグラフィを意味するに至ってしまったのである。

それそのものを目的としてであれ、全く次元を異にする別の目的を成就するための手段としてであれ、既成の法律もしくは一般に通用している道徳律を逸脱した行為を行う必要があり、そしてこの行為を秘密にしている個人、あるいはその故に秘密結社と呼称されるであろう団体は、古今東西に遍く存在してきたし、これからも存在し続けることであろう。いわゆる秘密結社に限ってみても、この秘密は、組織の存在自体に関わるものであるかもしれないし、はたまたその構成員の身元に関わるものであるかもしれないし、もちろん組織によって伝承されている教えに関するものであるかもしれない。一口に秘密結社と言っても、犯罪結社や反体制的政治団体、テロリストやカルト宗教もあれば、私たちにとっての関心事であるエゾテリスムを伝えるイニシエーション組織もあるし、しかも十九世紀のカルボナリのように、元々はイニシエーションを目的としていたのが政治的陰謀家の巣窟へと墮するとい

うようなこともあるわけである。にもかかわらず、これら全く異質な個人や団体をひっくるめて、その性質について考えてみもせず、秘密を持っているということだけで一緒くたにすることが無茶であるのは自明であろう。

だが、この無茶が、世人にとってのみならず、卓越した知性の持ち主にとってさえ、必ずしも自明ではなかったのである。例えば、神学者として赫々たる名声を後世に残したルドヴィコ・マリア・シニストラリ神父にしてからが、次のような短絡的な言辞を恬然として筆にしているのである、「悪魔と契約を結ぶという罪が立証されているときには、そのこと自体によって悪魔との性交渉は立証されたことになる。何故ならば、夜のサバトにおける、魔女たち、妖術師たちの目的は、宴と歌舞の後にする件のおぞましい交わりだからである。そうでもなければ、この犯罪のいかなる証人ともありようがない。何となれば、悪魔は魔女の目には見えても、他者の目では捉えられないのだから<sup>19</sup>。」悪魔は普通の人間の目には見えないのであるから、悪魔との性交渉の犯罪を立証するためには、ひそかに夜のサバトに参加しているという間接証拠に拠るしかない。しかし、それは同時に有無を言わせぬ直接証拠でもある。何故ならば、人目を忍ぶサバトの集いは、隠れて行われているという事実自体からして性的放蕩を目的としたものでなければならぬからである。往昔の宗教裁判所においてであれば後は拷問の匙加減一つで何とでもなったのであろうが、私たちとしては秘密すなわち性的乱行という理屈には同意しかねると言わざるを得ない。

何故ならば、実際にそうした行為を伴う集会が秘密裏に営まれていたとしても、当の性行為が目的であるのか手段であるのかを外から見ただけで判断するのは早計だからである。もちろん、集団で快楽に耽るだけを目的とした下卑た秘密集会であるに過ぎない場合もあろうが<sup>20</sup>、あるいはタントリズム

---

<sup>19</sup> Ludovico Maria Sinistrari, *De la démonialité*, traduit par Isidore Liseux et Isabelle Hersant, Editions Ombres, Toulouse, 1998, pp. 95-96. 1872年に発見され、1875年に我が国の梅原北明を髣髴させる奇特な出版者イジドル・リザーによって翻訳出版されたこの本は、ユイスマンスの『彼方』にも言及されているように、十九世紀末にあつて相当な話題になった。タイトルにもある *démonialité* は悪魔との性交渉を言うので、悪魔姦、鬼姦とでも訳すべき語である。

<sup>20</sup> しかし、こうした種類の秘密集会にしてからが、主催者たちさえ知らぬ間に、本来の意味でエゾテリックな意味を持っているという可能性さえあるのだ。フィクションではあるが、映画『アイズ・ワイド・シャット』の中で描かれたこの手の集会が、十九世紀末にダイアナ・ヴォーンによって暴露されたフリーメーソン＝サタニスト結社の儀軌から想を得たものであり、ために秘密結社の報復を受けてスタンリー・キューブリックは非業の最期を遂げたなどというゴシップめいた話もあるくらいなのだから、眉に唾する批判精神と、何よりも斯道についての造詣が常に要求されて

や性魔術のような正真正銘のエゾテリズムによって理論的に裏打ちされた修法の一環である可能性もあれば、ブーラン神父のごとき逸脱した神学者がコペルニクスの発想転換によって原罪の手段を贖罪の手段へと変じて魂の救済を目指しているかもしれないし、あるいはヴィルヘルム・ライヒの信奉者たちが科学とオカルトの狭間にオルゴン・エネルギーを追い求めているのかもしれない。まだまだいくらかでも挙げることのできるこのような例によっても分かるように、密かに性行為が行われているという事実には無数の説明が対応し得るのである。しかるに、その一事をもって、秘密すなわち性的頹廢、エゾテリカすなわちポルノグラフィと直ちに結論するのでは、無知と無謀の謗りは免れない。なるほど、orgie という言葉は口にすることも憚られるような意味を持つに至ったが、そもそもからすれば、この語は全く異なる理由からやはり口にすべきではない神の秘儀を表わしているのである。

この節では英語のエゾテリカが持つに至った意味との関連で、エゾテリズムとエロティズムを直結させる見方に付いて述べてきたわけであるが、エゾテリックなものを黒く塗らたくろうとする趣向はこれに限らない。次の引用文などはエゾテリズムと妖術の実践とを混同している。「原始文明以来、呪詛は啓示のエゾテリズムの中に現れ、居座り続けている。〔中略〕ある民族の社会状態によって宿命的に招来される拝金主義は秘儀のヴェールを絡げる。イシスは加護を齎ぎ、個人の下卑た憎しみが金を払う<sup>21</sup>。」これ自体としては他愛のない文章ではあるが、「啓示のエゾテリズム」の表現は以降の主題ともなるであろう。

上に見たように、いずれも隠されているからといって、エゾテリック直ちにエロティックとはならないのではあるが、他方でこの共通項に基づいてエロティックなものがエゾテリックなものを象徴する場合がある。その最も高遠なる例の一つであるイブン・アラビーの夢の場合をまずは見てみよう。「イブン・アラビーが『フトゥーハート・アル・マキヤー』（第二卷九十八章二十三節）に物語っているところでは、普遍的自然について書きながら眠りに落ちたところが、夢中に母が彼に向って隠し所をはだけて露わにするのを見た。見つめていると、母は微笑んでいたが、やがてこうした身振りには不法なところがあると気付いて、白い外套で母を覆った。彼はさらに言う、このようにして自然のある種の様相を私が恥じらいの気持ちから美辞麗句で覆い

---

いるのである。

<sup>21</sup> Claire Vautier, « Souvenirs d'une voyante », *Echo du merveilleux*, n° 65, 15 septembre, 1899, p. 353.

隠しているのは、それが理性によって言葉にされることは適法ではないからである<sup>22</sup>。」それが適法であるかないかはともかく、夢枕に立った母によって象徴されている普遍的自然、すなわち男性でも女性でもない中性の神あるいは最高原理の女性的様相、ヒンドゥー教のシャクティ、カバラのシェキナー、そして老子のいわゆる玄牝の門の如何についてはさしあたり論じるべくもない<sup>23</sup>。エゾテリスムとは何かという一般的な文脈において重要なのは、何が隠されているかよりもむしろ何故隠されているかだからである。

この引用文において注目すべきは、母の隠し所に対する「はだけて露わにする (dévoiler)」、次いで「覆った (voila)」という表現である。ヴェールを外し、ヴェールで覆うという二重の動作は、正しく *révélation* の語の二重の意味に対応しているのであるが、一つ目の意味に関しては、私たちがこの語を見るなり直ちに頭に思い浮かべる啓示という言葉によって表される意味であるだけに、話は比較的簡単であろう。「真にイニシエーション的」と称し得る知識はおしなべて、意識的に確立された高次の状態との連絡から結果する。そして、こうした連絡に截然関係しているのが、もしそれを本義において、現代の日常語にあって甚だ頻繁に行われている乱用を度外視して理解するのであるならば、「靈感」や「啓示」といった語なのである<sup>24</sup>。」そして、「受け取る存在自身にとっては「灵感」であるところのものは、何らかの表現方法によって、そうすることが可能である限りにおいて外的に表わされることで、その存在からそれを伝えられる他の存在にとっては「啓示」とな

---

<sup>22</sup> Titus Burckhardt, «Nature sait surmonter nature», *Etudes Traditionnelles*, n° 281, janvier-février 1950, p. 11, n. 1. 「そして人間にとっては、アッラーが彼に語りかけ給うことはありえない。ただし、啓示としては別であり、あるいは、帳 (voile) の後ろから、あるいは、使徒 (天使) を遣わし、彼 (アッラー) の御許可によって御望みのことを啓示することも。まことに、彼は至高にして、英明なる御方。」(コーラン, XLII, 51.)

<sup>23</sup> 「谷神は死せず、是れを玄牝と謂う。玄牝の門、是れを天地の根と謂う。綿綿として存するが若く、之を用いて勤まず。」(『老子』、蜂屋邦夫訳注、岩波書店、2008年、34頁。) シュリーマンがトロイアで発掘した有名な女神像の隠し所に描かれたスワスチカを経て、このことは薔薇十字やロサ・ミスティカとも関係してくるのであり、さらには、こうした能産的自然の象徴としての女性は、中世期のイコノグラフィに登場するいわゆる Frau Welt (Femme Monde、しかし世界が男性名詞であるフランス語では、monde はむしろ形容詞の意味で理解するべきであるかのごとくであり、異なる含意が生じる)、正面から見れば美しいが、その背中では腐れ爛れている女性のイメージと対立しているのであるが、脚注の中であってなおこれ以上は論じる暇がない。

<sup>24</sup> René Guénon, *Aperçus sur l'initiation*, Editions Traditionnelles, Paris, 1945, p. 211.

る<sup>25</sup>。」通常の条件下の人間よりも「高次の状態」、それは必ずしも神であるとは限らず、天使に類する被造物という可能性もあるわけであるが、ともかくその本質の如何にかかわらず人間を超越した存在の状態への到達によって得られた、当然人間を、厳密に言うのであれば、存在としての高低を決定するのは認識能力の性質なのであるから、人間に固有の認識能力である理性を超越する知識に預かり、なおかつこの知識を伝達するという使命を帯びた存在を、私たちは預言者と呼ぶわけである。預言者はこうして得られた知識を、彼のように直接的な仕方ではそれに預かることのできない他の存在に対して伝えなければならない。しかし、ここで問題となるのは、この靈感による超人的な知識の獲得によって預言者は正しく超人的な状態にある一方で、知識の受け取り手となる他の存在に関しては当然人間であるに過ぎない以上は、肝心の伝達は伝達されるべき知識の性質に見合った超人的な手段によってではなく、通常の間にも理解可能な手段、すなわち理性の固有の具としての人語によらないではないわけである。超理性的な形式と内容を有する知識を、飽くまで理性の認識可能性によって限定された言語によって表現しようとする以上は、この手段によって伝達されるのは預言者の得た知識の全てであるどころか、理性によって理解可能である限りにおいてのその知識であるに過ぎず、理性によって理解できず、言語によって表現され得ないものとしてのその知識に関しては、象徴的に暗示される他ないわけである。上の引用文中に「そうすることが可能である限りにおいて」と断つてあるのはこうした経緯を述べているのである。さて、この理性によって理解可能である限りにおいてのその知識を「何らかの表現方法によって」「外的に表わすこと」、預言者以外の存在にとっても理解可能な形式によって言い表し、靈感によって得られた知識のヴェールを取り除き開顕することが「啓示」であるということになる。これが *révélation* の一つ目の意味、上から、知識を伝達する預言者の側からした意味である。

ところが、下から、その他の存在の側からするとき、*révélation* は、預言者の仲介なしには知ることのできない超越的な知識を覆うヴェールの開顕であると同時に、彼らが知るべくもない限りにおいてのこの知識の、つまり彼らの限定された認識能力によっては正しく知ることのできない「理性によって言葉にされることは適法ではない」ものとしてのこの知識の、同じ預言者による隠蔽、靈感によって知られた知識を再びヴェールで覆うことでもある。「甚だ広く行われている言語学上の誤謬にもかかわらず、啓示とは照明の真

---

<sup>25</sup> *Id.*, p. 211, n. 2.

逆である。再び覆うことが覆いを取ることの反対であるように、啓示することはヴェールを取ることの反対である。啓示とは真理の上に置かれた雲、その時々、の道徳的感性に見合った形をした雲である。乱暴な言い方をすれば、発行された時点での感情や欲求に相応する嘘であり、それを生み出した感情が変容していくのにつれて、先々、論議され、否定され、そして取り換えられる定めなのだ<sup>26</sup>。」

通常人の理性によってでは到達不可能な真理を靈感によって知ることができたとき、預言者が行わなければならないのは、これを通常人の理性によっても到達可能にすることである。もちろん、定義上理性を超越しているこの真理をそのまま上から下に伝えることは問題とならない。何故ならば、もしそのままの真理が通常人によっても理解可能なものであったとしたならば、預言者は無用である、と言うよりもむしろ万人が潜在的な預言者であることになってしまうからである。他方で、この真理の中から通常人によっても理解可能な部分だけを切り離して伝えることも問題とはならない。何故ならば、全体とは部分の集合ではない以上は、部分的な真理とは真理の部分ではなく、むしろ誤謬だからである。かくして、そもそも預言者なくしては知り得ないのではあるけれども、真理とそれを受け取る他の存在だけを見るときには、伝えられるものは当の真理そのものではない。それを理解可能にするため、啓示が行われる際の受け取り手の性質、知的感情的道徳的等々の条件への適合のため、加工された真理が伝えられるのである。これこそが *révélation* の二

---

<sup>26</sup> Matgioi, *La Voie métaphysique*, Editions Traditionnelles, Paris, 1936, p. 4. 1905年に初版の出たこの作品は、上の引用箇所一つを取ってみても歴然としているように、露骨に反宗教的な態度を示しているわけであるが、だからと言って作者マトゾイ、仏印で道教のイニシエーションを授かったとされるこの人物を、第三共和政的反カトリック反聖職者主義者であると考えるのは単純に過ぎるであろう。実に、かかる言辞を含む『形而上の道』再刊の二年前、1934年に同じ作者はリジューの聖テレーズを主題とした著作を、それも枢機卿バリ大司教ボードリヤール殿下の序文付きで、恬然として刊行しているのである。ここに言う対象となる人々の条件に応じた啓示の適合との関連で興味深いのは、神ではなくて大衆の側における噂の形成の社会的な過程との比較である。「肝心なのは深い意味を、隠された真理を伝達することである。かてて加えて、進行していくにつれて、噂は新しい大衆と出会うようになる。これら大衆の部分のそれぞれが特殊な語彙、特有の象徴、そのステレオタイプ、それに固有の考え方を有している。売り手が客に合わせた口上をするように、新たな客層のそれぞれによって創造されるコミュニケーションの要求に噂は適合するのだ。」(Jean-Noël Kapferer, *Rumeurs*, Editions du Seuil, Paris, 2009, p. 167.) イタリア語で噂は *rumore* ではなく *voce* であるわけであるが、民衆の声は神の声ではなかっただろうか。エメラルド板の有名な格率「上なるものは下なるものの如し」の応用に他ならないこの問題については、エゾテリズムとフォークロアの関係を取り扱った次稿の主題ともなるであろう

つ目の意味、下から、それを受け取る側から捉えられたときの、再びヴェールで覆うことという意味である<sup>27</sup>。

révélation の語に関する如上の展開は、あるいは本題とは直接的な関係のない脱線と思われたかもしれないが、いかさまエゾテリズムとは何かを考えるに当たって必要不可欠のものであった。とこう言う訳は、本論において闡明すべきエゾテリズムの定義は、ほとんどこの語の二重の意味の理解に係っているからである。実に、エゾテリズムについて可能な定義が、ルネ・ゲノンの深甚なる形而上学から大衆の語り伝える都市伝説に至るまで、およそエゾテリズムの名で呼ばれる多種多様な言説群に等しく妥当するような定義があるとすれば、それは *révélation de révélation* の三語に尽きると私たちは考えているのだ。秘密教エゾテリズムとは、ヴェールを取られたものを再びヴェールで覆うこと（秘密）であり、再びヴェールで覆われたものからヴェールを取ること（教え）なのである。

*révélation de révélation* の考え自体は私たちの独創ではなく、ジョゼフ・ド・メーストルの作品『フリーメーソンリー』に由来する。1925年にエミール・デルマンガンによってこの表題の下に公にされた未公開の手稿は、1782年、当時のメーソンリーの混乱状態に終止符を打つべく企図されたヴィルヘムムスパート会議に際して、メーストルが個人として書いた建白書であり、エゾテリズムを伝承するイニシエーション結社としてのフリーメーソン構想を述べたものである。彼にとって「真のメーソンリーとは無上の人間科学、つまりは人間の来し方行く末の知識であるに過ぎない<sup>28</sup>。」この真のメーソンリーは、メーソンリーと言われたときに俗人たちの思い浮かべるそれではない。「取るに足らない青色メーソンたち<sup>29</sup>」の「卑俗なフリーメーソンリーは、蒼古たる樹幹から切り離されおそらくは腐った枝である<sup>30</sup>」。そして、大元にあるその樹幹とは「世界にありとある国の全てに認められる原始の伝統<sup>31</sup>」

---

<sup>27</sup> 出エジプト記, XXXIV, 29-35.のモーセのヴェールはこの二つ目の意味において理解されなければならない。

<sup>28</sup> Joseph de Maistre, *La Franc-Maçonnerie*, L'Harmattan, Paris, 1993, p. 69.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 81. 青色メーソンとは徒弟、職人、親方のいわゆる象徴位階のメーソンたちのことで、それに対して高位位階のメーソンのことを赤色メーソンと言う。

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 58. 幹と枝の比喩は、このメーストルの手稿の発見より以前、より広い東洋と西洋の関係の文脈の中でルネ・ゲノンによって用いられている。「東洋に対する西洋の真の位置は、結局のところ、幹から切り離された小枝のそれでしかない。」(René Guénon, *Introduction générale à l'étude des doctrines hindoues*, Editions Traditionnelles, Paris, 1951, p. 13.)

<sup>31</sup> Joseph de Maistre, *La Franc-Maçonnerie*, *op. cit.*, p. 76.

に他ならない。「エルサレム、メンフィス、アテネ、ローマ、ベナレス、キト、メキシコ、そしてアメリカの野蛮な掘立小屋は、かくして異口同音に声を挙げて同一の教理を宣布しているのである。かくまで異なった、そして決していかなる接触点をとて持ったこともない国々に共通のこの永遠の観念は自然なものなのではないだろうか。私たちを私たちたらしめる霊的本質に必然的に属するものなのではないだろうか。もしそれが生まれながらのものでなかったとするならば、いったい万人はこの本質をどこで手に入れたというのだろうか<sup>32</sup>。」「原始の伝統」、遍く全民族に認められる「同一の教理」とは、「私たちを私たちたらしめる霊的本質」、すなわち「無上の人間科学」であり、真のメーソンリーはその獲得を目指すのでなければならない。そして、そのメーソンリーの組織のためにメーストルは三位階から成るプログラムを提唱したのであるが、その第三位階の、つまりはこの組織全体の最終目的が *révélation de révélation* なのである<sup>33</sup>。

では、メーストルの所願は、いったいどのようなものであり、いかにして到達されるべきものなのであろうか。それが端的に表れている箇所を引いておく必要があるだろう。「新約旧約両聖書にあっては全てが秘儀であり、いずれかの法を奉じる選ばれた者たちは真のイニシエに他ならなかった。であってみれば、いとも尊いかの古代に問いかけ、聖なる寓意をいかに解していたのかを尋ねてみなければならない。聖書の中に頑なに字義的な意味をしか見ようとしない近代の作者らに打ち勝つための武器を、こうした種類の研究が私たちにもたらすであろうことを、誰が疑えようか。私たちが日ごとにその意味も知らないで用いている宗教の秘儀という表現一つで、連中は既に擯斥せられているのである。この秘儀の語は、そもそもからすれば、それを所有する人々によって類型の下に隠された真理に他ならなかったのだ<sup>34</sup>。」こ

---

<sup>32</sup> *Id.*, *Oeuvres complètes*, t. II, Emmanuel Vitte, Lyon, 1892, p. 369.「決していかなる接触点をとて持ったこともない」の記述は、安易な起源説、借用説を退ける意図があるのであろう。実際、アレクサンドロスがインドに文明をもたらしたとか、カバラは新プラトン主義から発展したといったような説は、ただの誤謬であるばかりではなく、全ての起源をギリシアに求め、それを受け継ぐものとしての自らの文明の優越を打ち出そうとする西洋の偏見と底意を感じさせないではない。

<sup>33</sup> Joseph de Maistre, *La Franc-Maçonnerie*, *op. cit.*, p. 84.

<sup>34</sup> *Ibid.*, pp. 105-106. ユダヤ・キリスト教の聖書に限らず一切の聖典には字義通りのその下に隠された意味が、必ずしも一つではなく複数隠されているという考え方はエゾテリスムの枢軸である。「聖書中の言葉は大抵が高度に専門的であって、様々な参照の水準にあって数多くの意味を孕んでいるのだから、唯名論者であってさえ、意味論的な見地よりする聖書の解釈者のおかげで裨益するところがあるのを自覚するべきである。」(Ananda K. Coomaraswamy, *Selected Papers*, vol. II, Princeton University

の箇所を評してルネ・ゲノンには言っている、「一般にエゾテリズム、殊にキリスト教エゾテリズムの实在をこれ以上に鮮明に、これ以上に明確に述べる事が可能であろうか<sup>35</sup>。」すなわち、靈感によって得た天啓を聖典として他者に伝達するべく言語表現という形を取り、あたかもパリンプセストでもあるかのように、これに字義的なものから秘儀的なものまで重層する意味を込める術を知っている預言者のエゾテリズム（ヴェールを取られたものを再びヴェールで覆うこと）、そしてそれとは逆向きに、字義的な意味から秘儀的なそれへと、隠された真理へと遡って行く術を知るイニシエのエゾテリズム（再びヴェールで覆われたものからヴェールを取ること）とがいずれも申し分なく言い表されているわけである。

しかし、普通エゾテリズムというときに問題となるのは、そして実際にメーストルやゲノンが主として念頭に置いているのは、後の方の、隠された真理へと到達することを目指すエゾテリズムである。そのための手段となるのは、メーストルがクール・ド・ジェブランの著作を念頭に置いて述べているように「いとも尊いかの古代に問いかけ、聖なる寓意をいかに解していたのかを尋ね」ることであり、「一なる伝統を下に隠した数知れぬ形の迷宮の中で、方向を掴むことを可能にしてくれるであろうアリアドネの糸<sup>36</sup>」を手に入れることである。「近代で最も天才的なカトリック、ジョゼフ・ド・メーストル伯爵<sup>37</sup>」の言葉以前のエゾテリズムから想を受けてオキュルティズムを作り上げたエリファス・レヴィは言う、「この偉大なる人物の信念と希望とを共有する私たちは、オキュルティズムの古き聖堂の残骸を敢然掘り起こした。カルデア人、エジプト人、ヘブライ人の秘密教に諸教理の変容の秘密を尋ねたところが、永遠なる真理が私たちに答えた。存在のように、一にして普遍なる真理が<sup>38</sup>。」

---

Press, Princeton, 1977, p. 262.)

<sup>35</sup> René Guénon, *Etudes sur la franc-maçonnerie et le compagnonnage*, t. I, *Etudes Traditionnelles*, Paris, 1964, p. 27.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 29. 「Ariane は i の音位を転倒すれば *airagne* (蜘蛛) の形になる。[中略] 動詞 *αἶρω* は取る、捉える、牽く、引き付ける、を意味する。 *αἶρων*、取り、捉え、引き付けるものはこれに由来する。なればこそ、 *αἶρων* は磁石である。」 (Fulcanelli, *Le Mystère des cathédrales*, Pauvert, Paris, 1979, p. 63.) 磁石は北を指す。ところで、ゲノンを始めとしてエゾテリズムを論じる作者の大多数にとって、その他一切の伝統の元となった原始の伝統とはヒュベルボレアの、つまり極北の伝統なのである。

<sup>37</sup> Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, Robert Laffont, Paris, 2000, p. 9.

<sup>38</sup> *Ibid.*, pp. 9-10.

十九世紀前半にエゾテリズムという言葉が最初に用いたとされるマテは、空間的な意味におけるその普遍的な性格を強調していたのであったが、同世紀の中頃に登場したエリファス・レヴィは加えて時間的な意味における普遍性をも主張するに至ったわけである。エゾテリズムは何故普遍的でなければならないのか。答えは簡単である。エゾテリズムによって形を与えられる真理は、それが常人の理性によってではなく預言者の靈感を俟って始めて知ることが可能となる神的な超人間的な起源を持つが故に、そして靈感による直観ではなく理性による推論を俟って始めて誤謬が可能となるが故に (*Errare humanum est.*)、不可謬であり、遍く真理でなければならないからである。ある時代ある場所にあつては真でありながら、別の時代別の場所にあつては真たり得ないのは、真理そのものではなく、時代と場所に適合するためにこの真理が纏う形式に他ならない。「一なる伝統を下に隠した数知れぬ形の迷宮」に踏み惑うのではなく、「諸教理の変容の秘密」を知り、他なる形の下に一なる真理を究めることこそがエゾテリズムの本懐なのである。そのための「アリアドネの糸」とは結局のところ、この「一なる伝統」の鎖、預言者の靈感によって知られた知識の啓示を、この預言者の生きた時間と場所から今この場所まで繋ぐ霊的な紐帯である。他方で、「この永遠の観念は自然なものなのではないだろうか。私たちを私たちたらしめる霊的本質に必然的に属するものなのではないだろうか。もしそれが生まれながらのものでなかったとするならば、いったい万人はこの本質をどこで手に入れたというのだろうか。」

私たちの外に伝統があり、私たちの内には霊的本質がある。両者の関係を簡単に見ておこう。メーストルにとってのメーソンリーの、人類の「原始の伝統」の別名としてのメーソンリーの目的である「無上の人間科学、つまりは人間の来し方行く末の知識」とは「私たちを私たちたらしめる霊的本質」の知識であり、結局のところ、それは私たち自身についての知識に他ならない。もちろん、私たち自身についての知識を求めるべきは、ひとえに私たち自身の内にでなければならない。「この知識の原理を見つけることができるであろうはただ私たち自身の内にであつて、断じて外的対象の中にはない<sup>39</sup>。」人間が人間として存在していること自体によって、生得的な仕方である人間に備わっている霊的本質ではあるが、少なくとも現在人間が置かれている状況にあつて、この霊的本質の認識へと到達するための手段は、一部の例外を除けば、生得的であるとは言えない。教導が必要となつて来る。それこ

---

<sup>39</sup> René Guénon, *Mélanges*, Gallimard, Paris, 1976, p. 177.

そが、「アリアドネの糸」、「一なる伝統」についての伝統的知識であるというわけである。

では、エゾテリズムがその目的へと到達したとき、つまり預言者が靈感によって得た知識の啓示を受動的に授かるエグゾテリズムの段階を超えて、この知識の源泉自体へと遡って行ったとき、その先にあるアデプトの状態とはどんなであろうか<sup>40</sup>。「彼はド・メーストル氏よりもカトリックで、ルターよりプロテスタントで、大ラビよりもイスラエルの裔で、ムハンマドよりも預言者である。真理を曇らせる体系と感情を超えたところに彼はいるのではないだろうか。普遍的信仰というこの割れた鏡の破片のめいめいがとりどりに映し出し、いずれもが互いに異なり相争う宗教であると人のみならず、散乱する光線の全てを意のままに統一してみせることが彼にはできはしないだろうか。ただ一つの人類だけがこの世界にあるように、ただ一つの存在だけがあり、ただ一つの真理だけがあり、ただ一つの法だけが、ただ一つの信仰だけがあるのである<sup>41</sup>。」「普遍的信仰」とは、「この語の本来の意味での、等しくウロンスキがそれを理解していた意味でのカトリシズムであり、彼にとってこのカトリシズムは、あらゆる民族の聖典に収められた諸伝統を統合するに至ったときに始めて十分に有効的な実在を持つことになる<sup>42</sup>。」さらには、このカトリシズムとは「原始の伝統」、「あらゆる民族の聖典に収められた正系の伝統、各民族、各時代に適合するべく様々な形式を纏いながらも現実にはあらゆる場所にあつて同一の伝統<sup>43</sup>」である。

したがって、エゾテリズムの目的は、個々の伝統、個々の啓示の外的形式すなわちエグゾテリズムの彼方を詮索することには留まらない。個々の伝統の、個々の啓示のエゾテリズムの彼方に、それらの分析的な総和ではなくて総合的な統一の所産として、原始の伝統の、象徴的にアダムと呼称される原人に下された原始の啓示のエゾテリズムを見出すことこそが、この真の人間科学の本願であると言えるのである。こうした意味におけるエゾテリズムを最も明確かつ明晰な仕方でも論じたルネ・ゲノンの作品に対する、キリスト教

---

<sup>40</sup> 元々は薔薇十字の術語に属していたアデプトとは「イニシエーションの十全性を有効に現実化した存在」 (*Id., Aperçus sur l'initiation*, Editions Traditionnelles, Paris, 1945, p. 66.) を指している。

<sup>41</sup> Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 368.

<sup>42</sup> René Guénon, *Etudes sur la franc-maçonnerie et le compagnonnage*, t. I, op. cit., p. 28.既に述べたようにメーストルの思想的影響の下にオキュルティズムを構想したエリファスは、さらにエーネ・ウロンスキに直に師事していた。両者の関係については Paul Chacornac, *Eliphas Lévi*, Chacornac Frères, Paris, 1926, pp. 131-139.を見よ。

<sup>43</sup> René Guénon, *Mélanges*, op. cit., p. 178.

ヘルメス主義者のルイ・シャルボノー・ラセーの評言は、当然批判的な文脈においてではあるものの、要領を得ている、「彼の弟子の一人は1946年の公現祭の日にこんな風にしたことでした、「突き合わせてみると、諸宗教、諸伝統の差異は消滅する。何となれば、それらのいずれもが、人類の天文学的、宇宙的、歴史的展開の某かの時点における某かの民族に適当した神の種々相を、摂理の法に従って表現するものとして捉えられることになるからである。」正にゲノン氏の主義であります。相次いで居住する場所に応じてある信仰から別の信仰へと、いかなる支障とてなしに移ることのできるイニシエのエリート向けの超宗教であります<sup>44</sup>。」

まず、この手紙の中に引かれているような文章が公現祭、つまり東方三博士がキリストの礼拝に訪れた日に書かれたということは偶然ではない。「こうして生まれたばかりのキリストに対して〔中略〕原初の伝統の真正なる代表者たちによって行われた礼拝は、同時に、このことによくよく注目されたい、件の伝統に関するキリスト教の完全なる正統性の保証なのである<sup>45</sup>。」人類の原初の伝統を受け継ぐマゴスたちがキリストを自らの主と、つまりは原初の伝統の啓示者と認めたということは、このキリストの教えが「正系の伝統」であることの証でもあるという訳である。

シャルボノー・ラセーの批判の方へ移ると、この記述がなかんづくゲノンの態度を目したものであることは明らかである。1920年代のパリで、カトリックの、それもネオ・トミスムやアクション・フランセーズに近い知識人として活動していたゲノンは、1930年にエジプトへ渡って以降はイスラム教徒でスーフィーのシャイフ、アブデル・ワヘド・ヤヒアとなったのである。しかし、それだけではない。周囲の環境に合わせて宗教を変えるというのは、古くは薔薇十字やフリーメーソンについても言われたことではあるが、やはり原初の伝統の知識の結果なのである。「こうした点へと到達した人は、直接かつ深奥なる（そしてただ単に理論なり言葉なりの上には留まらない）知識によって、一切の伝統教義の同一の大元へと至った人であり、外的形式の多様性、多数性の下に隠された一なる真理を、これらの形式のよって来る中心点に位することで発見した人である。〔中略〕その後で、この人たちは形式の中へと再び下りてくることも可能であるが、だからと言って、もはや形式によって影響されることもなければ、彼らの有する深奥なる知識がために

---

<sup>44</sup> Louis Charbonneau-Lassay, *Lettre à André Gircourt*, in PierLuigi Zoccatelli, *Le Lièvre qui rumine*, Archè, Milan, 1999, pp. 65-66.

<sup>45</sup> René Guénon, *Le Roi du monde*, Gallimard, Paris, 1958, p. 36.

いかなる変化を被ることもない。あたかもある原理から結果を導き出すように、上から下へと、内から外へと行くことで〔中略〕彼らは根本教義のあらゆる適合を成し遂げられるのである。<sup>46</sup>」一度、外（エグゾテリスム）から内（エゾテリスム）へと至り、個々の伝統の大元にある原始の伝統の知識に達するや、この知識を表現するために既存の外的形式を利用することができる。何故ならば、それらの外的形式自体が、それ以前の預言者が靈感によって得た同じ原始の伝統の知識の、対象となる民族の諸々の条件に合わせた啓示、表現に他ならないのであるから。この融通無碍の境地への到達、個々の啓示の彼方に、より正確に言えばそれらの最深奥に一なる真理の一なる啓示を見ることこそが、「イニシエのエリート向けの超宗教」としてのエゾテリスムの真骨頂なのだ。

＊

預言者が靈感によって得た知識を再びヴェールで覆うことに端を発したエゾテリスムのサイクルは、イニシエのエリートがこのヴェールを除くことによって閉じられる。両極端は相接するという次第で、エゾテリスムにとっての知識の始まりと終わりとは最終的には一致するのである。しかしそれも理の当然であったろう。何故ならば、「無上の人間科学」の究極的な目的は、無上の人間の科学、アルファでありオメガである第二のアダムの知識でなければならないのだから。

一方で、未だ閉じられてはいないサイクルも残されている。と言うのは、既に述べたように、ルネ・ゲノンの深甚なる形而上学から大衆の語り伝える都市伝説に至るまで、およそエゾテリスムの名で呼ばれる多種多様な言説群に等しく妥当するような定義を求めて、私たちは「イニシエのエリート向けの超宗教」へと辿り着いたのであった。しかし、エリートと大衆、知的ヒエラルキーの頂点と底辺との言説とが、等しくエゾテリスムの語によって指し示されることができるというのは、いったいどうしたことであろうか。こちらの問いに関しては、エゾテリスムとフォークロアとの関連においてまた稿を改めて考えてみたいと思う。

---

<sup>46</sup> *Id., Aperçus sur l'initiation, op. cit., pp. 237-238.*